

---

**あさ**

あおつき

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あさ

### 【Nコード】

N2949G

### 【作者名】

あおつき

### 【あらすじ】

朝が嫌いな主人公の、ちょっと不思議な話

強烈な日差しに私は起こされた。カーテンをきちんと閉じていなかったせいだ。

気持ちよく目覚めても五分もすれば現実に引き戻され、とたんに気持ち盛り下

がる。朝はきまってブルーになるのだ。

小学生の時からずっとそうだった。私は朝がきらい。あわただしいのも、ゆっく

りごはんをたべられないのも、親が口うるさいのなんかも。ぜんぶぜんぶきらい。

そういう朝がきらいなのは、きっと私だけじゃないはずだ。幸い一人暮らしをして

いる今は、口うるさい親はいない。いなければ少しは朝を好きになれるかなあとお

もっていたけど、もっときらいになった。なんでかっていうと、せんとくやあらい

ものを一人でぜんぶやらなきゃいけないから。それにくわえてごはんも作らなきゃ

いけない。口うるさい親がなくても、あわただしいのは変わらない、きつと今の

ほうがずっとあわただしい。

憂鬱であわただしい朝をどうにか乗り切ると、私の一日が始まる。一日といっても、

バイトに始まってバイトで終わる。でもそういう一日が私はなんとなく好きだ。日

が暮れるまで働いて、帰宅するだけ。何にもない日常だけど、その何もない日常が

私は大好きなのだ。

私のバイト先は喫茶店。繁華街からちょっと離れた小さなお店だ。のんびりと落

ち着いた雰囲気はこの店は、私のきらいなあわただしい朝とは正反對。古めかしい

家具、私のしらないレコードのジャケット、スピーカーから流れるちよつと昔の音

楽も薄暗い照明も、私は大好きだ。一番好きなのはマスターだ、私が少し仕事をサ

ボつても絶対に怒ったりしない、居眠りしていても優しく起こしてくれる。そし

てこの店では接客が遅くても、お客さんが怒ったりはしない。今の社会に溢れてい

るせつかちな人はこの店にはこないのだ。きっとそういう人は、大通りから外れた

小さな店を、わざわざ探したりしないからだろう。このお店ののんびりした空気を

好む人は意外と多く、混んでいるわけではないのだけど、お客さんはたえない。い

つも、誰かしらいる。そんな風にのんびりした空気の漂う店だから、たまにお客さ

んが来たのに気づかないことがある。そういう時はさすがに怒られる、けど一日一

回必ず怒られるのが私だ。そうやってのんびり過ごしていると、バイトも終わる。

それから後は私だけの時間だけど、親から電話がかかってきたりするとちよつと気

分が盛り下がる。小言を聞かされると尚更だ。ご飯を作って、食べ

終わる頃。大体

夜の十時前後だろうか、そのぐらいから一時間ほど本を読んで、お風呂に入っただか

ら寝る。これが私の日常だ。私はこんな生活を一年以上続けている。あきもせず、

まいにちまいにち。それに今は、この生活から抜け出したいくない。そうやって変化を受け入れない私は、あの日から何もかわっていない。あの人のいなくなつた、あの日から。

ある日の事、私はいつものようにバイト先へ向かつていた。いつもの道をいつもどおりのペースで歩いて。けれどその日は少し違っていた。昨日まで無人だったアパー

トに誰かが引つ越してきたようで、なんとなく空気が違うのだ。本当に些細な、ありきたりな変化。その程度の事でも、私は何故か恐怖を覚えていた。今の自分を取り巻く環境が少しでも変わってしまうこと、私はそれが凄く嫌だった。

けどそんな事は、私のわがままでしかない。私が変化を望まなくても、日常は日々変化していくのだ、

無人のアパートに越してくる人もいれば、今まで住んでいた家から出て行く人もいる。

だから、その程度の事は受け入れなければいけない。

しばらく考え込んでしまったのか、私はその場にたちつくしていた。そんな私を変

に思つたのかアパートの住人が私に声をかけてきた。

「あの、どうかしましたか？さっきからずっとこちらを見えていますけど」

私は話しかけてきた男の顔を見て、言葉が出なくなつた。あまりに

あの人に似ていたから、顔も背丈も服装の雰囲気も。そのとき無意識に、頬に涙が伝った。男も、私を見て一瞬かたまっていた。そしてこういった

「夕・・・か？」

男の口から発せられた言葉は、私の感覚を麻痺させた。私の名前も「夕」だからだ...

でも、あの人はもういないはずだ、私が変化を受け入れなくなつたあの日にいなくなつたはずだ。あの人は突然私の前からいなくなつたのだ、なんの前ぶれもなく、突然目の前から消えたのだ。さらわれたのでも、死んだのでもない。文字通り「消えた」

彼の存在自体も、今までなかったものになつていた。友達も彼の家族も、口を揃えて彼の存在自体を否定する。私だけが、彼の事を覚えていた。彼が消えた時から、私の時間は止まつていた。止まつていたんじゃない、自分自身でとめていたんだ。彼が消えてしまったという事を、受け入れたくがなかったゆえに。

でも、消えたはずの彼は今日の前にいる。そして、私の名前を呼んでいる。これは夢なのだろうか、現実なのだろうか。それとも私がうみだした、ただの幻なのだろうか。わからないけど、彼である事だけは確かだ。私が彼を、見間違えるはずがないから、それは確かだ。

「そうだよ... 夕だよ。あなたの恋人だよ」  
そういつて、私は彼に抱きついた。いや、無意識のうちに抱きついていた。彼はちよ

つと戸惑っていたが、私を優しく抱いてくれた、そして謝ったのだ。  
「夕…、ごめんな。いきなりいなくなつて」

そうして彼は、いつそう強く私を抱きしめた。

「ううん、いいよ。戻つてきてくれただけで、うれしいよ」

もうちよつと、彼とこうしていたかったけど、バイトがあるのでそれを彼に伝えた。

名残惜しかったけど、それだけは仕方が無い。

お店はいつもどおりで、彼との再会がまるで嘘のように感じられた。私は少し怖く

なつた、また彼がいなくなつてしまふんじゃないかと思うと。どうしようもなく怖い。

いつもは居心地のよいのんびりとした空気が、今日は凄く嫌なものに感じられた。そ

んな様子をみかねてマスターが声をかけてきた。

「どうしたの？震えているみたいだけど、大丈夫？」

「あ…、何でもないです。ちよつと震えちゃつて」

震えが全然止まらない。そのうちたつているのも辛くなつてきて、私はその場に座り

こんでいた。

「今日は無理しないで、帰つたほうがいいよ。倒れられたりしたら、大変だからね。」

「あ…、すいません。今日は、帰りますね。ごめんなさい、本当に」

「いいよ、君は全然休まないから、一日ぐらい気にしないさ」

そうして私は、バイトをはや引きした。

店を出ても、恐怖は全然消えなかった。私はまっすぐに、彼のアパートへ向かつて

いた。恐怖を拭い去るように、ただただ彼の姿を求めて、彼のアパートへ向かつてい

る。わきめもふらず、ただただ一心に。

彼のアパートについた。ドアの前に立つと、私はインターフォンを押した。ピンポ

ーンという音がして、中の足音がこちらへ向かってくる。ガチャリとノブが回ってド

アが開く、その先には彼がいた。私は安心したのか、その場で座りこんでしまった。

彼が心配そうに私の顔を覗きこんでいる

「タ…どうした？そんな青い顔して。それに震えてるぞ」

私は泣きながら、彼に言った。

「だって、またあなたがいなくなってしまうたらって思ったら、怖くて怖くて仕方が

なくて。そしたら、震えが止まらなくなっちゃって」

「そうか、ほんとにごめんな。今まで本当に辛かったんだな。けどな…、そろそろ行

かなきゃならないんだ。今度はもう、戻れないと思う」

私は彼の言っている事が全く理解出来ない、むしろ理解したくない。理解するのが、

怖い。でも、そんな私の気持ちを裏切って彼は言葉を続ける。

「タ…、俺はお前に会えただけで、それだけで幸せなんだ。それにな、やり残した事

があったから」

「やりのこした…こと？」

「いいにくいんだけど…今度俺が消えたら、お前の記憶の中から俺は消える。今まで

、ごめんな」

「やだ…、わすれたくないよ…。あなたの事忘れたくない……」

「けどな…タ。お前…俺の名前覚えてないじゃないか、それはな、俺がタの中から消

えかかっているって事なんだ」

彼は何を言ってるんだろう…、けれど彼の優しさだけは感じ取れた。私は泣き続けた、ずっとずっと泣き続けた。なんで泣いているんだろう。そう思った

途端、私は泣くのをやめた。その後どうしたのかは良く覚えていない、気づいたら自

宅に帰りついていた。何故か大きな喪失感があった、けれどその原因が何なのか、私

は全然わからなかった。喪失感があったけど、不思議と気分はいい。長い間私を縛っ

ていたものがなくなったようで、凄く開放的だった。こんな幸せな気分は、本当に久

しぶり。

明日もまたバイトだけど、何かがかわっていく気がする。またあわただし朝を向か

えるのかと思うと、ちょっと嫌だ。でも睡眠欲には勝てない。私はどう変わったとし

ても、朝がきらいなのだけは絶対に変わらないと思う。朝と言う存在が消えない限りは。

終わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2949g/>

---

あさ

2010年10月11日01時18分発行